E－12　市街地集合住宅におけるつきあいについて

広島大教育　　菊沢康子

目的　都市においては、住宅不足を補うべくアパートといわれる市街地住宅が作られて久しい。　これらの集合住宅では、様々な地域から、種々の生活習慣をもった人達が一つの集合体を突然に形成することになるが、このような集団の人間関係を把握する手がかりとして「つきあい」という面をとりあげ考察するため調査を行なった。

方法　大阪市内の分譲後間もない高層集合住宅の入居者、全世帯を対象につきあいについてのアンケート用紙を配布し、２９５戸分を回収した。（回収率３４％）

結果　世帯主の平均年令４１才、年収２３０万円、約半数が短大卒以上の学歴をもち、約３／４がホワイトカラー層、世帯人数3.5人、入居前はほとんどが大阪市およびその周辺都市に住んでいた調査対象について次のことがわかった。

(1)　交際圏別交際量の割合を大きい順に並べると、主人では血縁、職縁、その他、地縁となり、主婦では血縁、地縁、その他、職縁となる。いずれも３年前の愛知県における調査結果と順位は同じ。但し、分譲後間もないにもかかわらず、主婦の地縁は、約１／３と意外に多い。

(2)　血縁、地縁、職縁の交際量に対する考え方では、主人、主婦の差はみられない。

(3)　主人に関しては、潜在構造分析によって、つきあいに対して軽視型と重視型の２グループに分類した結果、つきあい軽視型には、高学歴、若年令の人の割合が多いことがわかった。